



**ニコラビデカレター**

**僕のせいでも下衆な男に**

**死ぬまで玩具にされる**

**最愛の彼女**

## 第一章 十月二十四日に送られてきたビデオレター

毎週土曜日、朝9時30分。

必ずポストには一枚のDVDが投函されている。それを部屋に持ち帰り、中身を確認することが、僕の日課だった。DVDの表紙には「10月24日 現調教記録」と記載されている。

親にバレないように、ベッドの下に隠した今まで送られてきた物を確認すると、一番古いので7月25日。もう『彼女』は大体3ヶ月も、奴の手によって……いや、これ以上考えるのはもう辞めたんだ。

夏休み前、僕の人生は全てが壊れた。

もう学校へ行く気力もなく、夏休みが明けた今も土曜日のポストと、月曜日の通院以外は部屋から一步も出ていない。毎日何をしているかだって？ そんなの決まっている。

ビデオレターを観てるんだ。それが、最愛の彼女、古谷《ふるや》 雫《しずく》の姿を確認できる唯一の手段だから。

部屋に鍵を掛け、DVDをレコーダーへと挿入する。ジジッと一瞬ノイズが走った後、画質の悪い映像が流れ始めた。ピンク色の部屋と照明、白いダブルベッドの横にある小さなテーブルには大量の玩具。

「雫……っ」

ベッドの上に正座する制服姿の少女を見て、僕は彼女の名を呟く。

真っ直ぐに伸びた黒い髪に丸メガネ。キチンと整えられた学校指定の制服。

一見すると地味に見える彼女だが、僕にとっては世界中の誰よりも美しいと思える。

去年の冬のクリスマス、勇気を出して告白して振られて、春にもう一度告白して〇不をもらい、何度かデートを繰り返して、ようやくと手を

繋いだことを思い出す。

——けれど、あの時の彼女はもういない。

「お、しッ……準備完了おと。おーい、彼氏くん？ 見てますかあ？」

カメラ外から酷く軽い男の声が聞こえてくる。そして、カメラの位置を微調整すると雫と同じベッドに座った。金髪でピアスを付けたホスト風の男。僕を不幸たらしめる人物。

「今日は、彼氏くんに見せたいもんがあるんだよ。な、雫？」

馴れ馴れしく雫の肩を掴み、身体に引き寄せると彼女はビクッと小さく跳ねた。

「あ……あの……一樹《かずき》さん、私……」

まるで子猫のように怯えた様子で震える雫。やめろ、その手を離せ。  
なんて台詞は9月25日のDVDでも言うことをやめた。

「え、雫ちゃん、まさか嫌なの？」

「ま、真彦《まさひこ》君に見せる必要は無いんじゃない……それに、このビデオレターだってもう……」  
「ふーん、言う事聞けないんだ」

男は急に立ち上がると、まるで壊れた玩具を見るような目で雫を睨んだ。すると、彼女は慌てた様子で弁解する。

「ち、違います！　そ、そう言うわけでは……」

「じゃあ言う事聞けるよね？　だって、雫は俺の都合のいい肉マンコなんだから」

人に、女性に対して最大限の侮辱。

でも、雫は「都合のいい肉マンコ」と言う言葉を聞き、うっとり頬を赤らめていた。僕と手を繋いだ時以上に、赤く、艶めかしく。

「てか、いい加減めんどくさいんだけど。さっさとしてくれる？」

「も、申し訳ありません！　直ぐにしますから怒らないで下さい……」

男の命令を受け、雫は制服のボタンを外していく。上から一個、また一個。

白いシャツがはだけ、ピンクのブラのホックを外し、丰满な胸が零れ落ちた。そして、自分で胸を抱えると先端をカメラに向けて『僕に』話しかけてくる。

「一樹さんの命令で、私……こんなの付けちゃいました。似合いますか……？」

勃起した太い乳首には家畜につけるようなタグがぶら下がっていた。雫は、それを見て誇らしげに語る。

「ようやく私、一樹さんのペットとして認めてもらったんです。ねえ、一樹さん？」

「あ？　ああ、そうそう、どーよ彼氏くん。最愛の彼女に似合うピアスだろ？」

馬鹿な。ペットだなんて、そんな。

僕は悔しさを齒軋りを鳴らした。

そんな雑に扱っていい女性じゃない。

僕の方が彼女を幸せにできるし、大事にする。

「しかもコイツ、引っ張っただけで喘いで面白いんだぜ？ ほら、ほら」

「あ……か、一樹さ、んッ！♡ あ、ああ、！♡」

伸びる乳首と胸と悦ぶ雫。喘ぎ声を上げながら、身をよじらせていた。

「今のお前の姿、もっとみせてやれよ」

「は、はひ……わ、わかりました♡」

スカート、パンツも脱ぎ、全裸になった彼女。そこに昔の面影はもう残されていない。

下腹部にはデカデカと *bitch* の文字が刻まれ、お尻には尻尾のようなアナルパールが挿入されていた。

刺青は10月17日に、もっと前のアナル開発は8月8日に行われたもの。

雫は尻尾を振り舌を出しながら、まるで雌犬のように四つん這いになると男に媚を売った。

「あ、あの、一樹さん！ わ、たし……言う事聞きましたあ……だから、早く、早くッ！」

「たく、めんどくさいな。ほら、これが欲しいんだろ？」

そうやって男が差し出したのは、一錠の薬剤。なんの薬かは僕にも分からない。

けど、この薬を雫は求め、口に含むと彼女は彼女で無くなるのだ。

「は、早くッ、そ、それを下さい！ 何でもしますから！♡」

「あ、なんでもする？ 立場がわかってねえな、このクソビッチが」

「——ひぐッ！」

男は豹変し、雫に拳を振るった。

悲痛な声を上げ丸くなる雫に、何度も何度も男の暴力が襲い掛かる。

「——あ、アイツっ！！！」

僕は思わず立ち上がり部屋を飛び出そうとした。だが、ドアノブを掴んだ時、我に帰った。

これはビデオレターで、僕は無力だということに。

できることは、ただ彼女の無事を祈り、この映像を最後まで見ることだけだと。

「ご、ごめんなさい……ゆ、許して下さい……お願いします」

テレビの前に戻ると、雫は自身を傷つける男に対し土下座をしていた。ベッドから降り、尻を突き上げ、地面に頭を擦り付ける。それを見た男は「はぁ」と溜息を吐くと、彼女の頭を足で踏みつけた。

「ふ、ふごッ」

「あゝあ、萎えたわ。お前、もう帰っていいよ」

「そ、そんな事言わないで下さい！ なんでもしますから、それだけはッ！」

必死に許しを乞い、自分を踏んだ足をペロペロと舐めながら服従のポーズを取る。

いつでも彼女は逃げ出せる。帰ろうと思えば僕の所に戻ってこれる。でも、今は彼処が雫にとって一番大事な場所なのだ痛感させられた。

「えーじゃあ次はおっさん相手に援交してきてよ。ノルマは100万ね」

「わかりました、援交します！ だから、あの……きよ、今日だけは……」

「チツ……わかったよ。ほら、食べ、豚みたいにな」

男はわざと錠剤を砕くと、床にばら撒いた。すると雫は目の色を変え、「ぶひッ、ぶひッ！♡」と鳴きながら舌で床を舐め回す。そして、奴の視線はカメラに、僕へと移った。

「こんな女、いつでも処分できるんだけどさ。まーもう少し、金になりそうだから借りとくね」

片手で謝罪のポーズを取る。全く申し訳なさそうではなかった。

僕が憤りを感じている間も、彼女は無様に床を舐め回し、必死に薬を拾っている。

豚の鳴き真似をしながら、大きなお尻を振って。

「さあて、そろそろ効いてくるかな？」

「はあ、はあ、ぶ、ぶひ——ッ、ひぎいいい！！♡♡」

突如、雫は頭を抱えて絶叫した。

腰が折れそうな程思いつきり反らせ、陰部からは潮が噴き出し床を汚す。

「あゝあ、汚ね。ま、後で掃除させっか」

「ひぐ、ひッ……ひぎッ♡」

「おら、へばってねえで楽しませろ、豚」

雫の頭を押さえ付けると、男はアナルポールを激しく上下に動かし始めた。

「ん、んごォ！♡ お、おお、！♡♡」

ジユボン、ジユポ、ジユポッ！！

空気と汁が混じる異様な音と、雫の絶叫が重なり合う。

尻の肉はめくり上げられ、そして押し込まれる度に彼女は光悦の表情を浮かべ、身体を震わせた。

「あ、彼氏くん。コイツのアナル、ガバガバだからもう楽しめないと思うから」

「お、ッ——おお、！！ い、イグ……イグウッ！！♡」

「なに家畜が人の言葉喋ってんだよ。豚は何て鳴くんだ？ ああ？」

「ぶひッ、ぶ、ぶひいひい、！ぶひいひい、！！♡♡♡」

豚の如く叫びながら、絶頂に酔いしれる雫。一体この姿を見た何人が、清楚だった頃の彼女を思い出すだろう。

僕は絶対に忘れない。本当の彼女はこんな下品な豚じゃない筈だ。

「豚の彼氏なんて大変そうだな。けど、身体はエロいんだよ、コイツ」

男はズボンを下ろし、陰茎を雫に向けた。

すると雫はがつつくように男の下半身にしがみつく。



「はひッ……ぶ、ひい！ あ、オチンポ……一樹さんのオチンポッ！」

ジュル、ジュルルル、ジュポ、ジュポ！

彼女は陰茎を一気に根元まで咥え込むと、激しいストロークを始めた。音を鳴らしながら吸い付き、僕以外の男を喜ばせる為に必死にしゃぶる。すると、男は雫の頭を掴むと思いつきり腰を振るった。

「おッ、おごッ！♡ お、おおッ！♡♡」

「お前フェラ下手くそだから、喉マンコ犯してる方が全然気持ちいいわ」

綺麗な髪もぐちゃぐちゃにされ、せっかくの奉仕も無下にされる。それでも、彼女は喉を抉られて嬉しそうに喘いでいた。

「お——おッ……おッ、おッ！♡」

「溢さず全部飲めよ、おら」

「ん、んお！？ お……おおお！♡♡」

ドク、ごきゅ、ごきゅ。

喉奥に注がれていく精子を美味しくそうに飲んでいき、そして全てを飲み干したと口の中をカメラに向けた。ゲップと共に放たれたムアツとした熱気でレンズが曇り、匂いまで伝わってきそうだ。そして、僕に向かってこう呟いてきた。

「み、見てますか……真彦君、私……こんな雌に堕ちちゃったんです。だから、もう私のことは忘れて下さい」

忘れる……忘れることなんてできない。

だって、彼女は僕の最愛の人なのだから。

一度、たった一度でいい。

チャンスさえあれば、元の関係に戻れる筈なんだから。

「はぁ〜スッキリした。じゃあ彼氏くん、今日はこの辺で、続きはまた来週送るからな」

男の声と共に映像は揺れ、真っ暗になった。だが、最後の最後、声だけが僅かに残っている。

「か、一樹さん……お、オマンコして下さい……私、もう何日もお預けで——」

「うるせえな、お前のガバガバマンコじゃイケねえんだよ。鬱陶しいッ！」

「——あぐッ！」

そして、殴られた音を最後に記録は閉じた。

僕は怒りに身体を震わせ、血が出るほど拳を握りしめていた。

けれど、同時に陰茎がズボンを濡らしていることにも、気が付いていた。